

こういう時代だからこそ

全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部教授 中島 俊克

2016年度から、「学びの精神」科目のひとつ、「グローバル経済社会を考える」を担当し、2017年度で2年目になるのだが、今、その講義ノートづくりに頭を痛めている。去年作ったノートが役に立たないほど、世の中の動きが早いからである。大事件が起こるだけでなく、それをきっかけに世界情勢についての見方がひっくり返るのだからたまらない。マスコミなら「潮目が変わった」などといって、執筆者・出演者を交代させるだけでいいのだろうが、たとえ受講者が入れ替わるとはいえ、同じ人間が同じ科目を大学で講じていて、去年と正反対の議論をするわけにはいかない。教師になって30年、これまでに「大事件」はしばしば起こったが、そのたびにある種の「復元力」が働くことを期待し、講義の内容もさほど変えなかったし、実際ほぼ予想した通りになってきた。しかし今回ばかりは、国際政治についても世界経済についても、ここ半世紀ほどの間、何とかうまく動いてきたしくみが、根底から崩れつつあるのではないかという思いを禁じ得ない。先生が何か良い知恵を授けてくれると信じて教室に入ってくる新入生諸君に、自分としては一体何をしゃべればいいのか、戸惑いが強まるばかりの今日このごろである。

しかし、このように慌てふためくのは、度胸が足りないというだけのことなのかもしれない。教養人たるもの、古典を読んで肝を練り、人間なんて昔から同じことを繰り返しているだけだということをしっかり腹に入れておけば、何が起っても驚かないはずではないか。古代ギリシャのトゥキュディデスという思想家は、自ら体験したペロポネソス戦争の詳細な記録である主著『歴史』のはじめの方で、「この本にこうして、一見つまらないことまで詳細に書き留めるのは、人間の性質が変わらない以上、自分が体験したこうした事件はいつかどこかでまた起こるはずだから、その時に自分のこの記述を役立ててもらおうと考えてのことだ」という意味のことを言っている。実際『歴史』は不滅の古典として、今日まであらゆる時代・地域の歴史家や社会科学者の鏡となってきた。読むべき対象はトゥキュディデスに限らず、史記でも源氏物語でも、あるいは聖書でも仏典でも、何でも構わない。いかなる事態に遭遇しても分別だけは失わないようにするため、とにかく古典に深く学ぶことが、こういうあわただしい時代には、何より大切なのではないか。

などと考えて自分を慰めはするものの、実際に古典に読み浸る時間はもはやなく、講義ノートの筆は一向に進まない。教訓。古典はぜひ若いうちに、しっかり読んでおくべきである。